自衛隊札幌病院研究年報　第46巻　21～28（2005）

〔原著〕

体験学習を取り入れた高齢者への日常生活援助演習からの学生の学びの分析

Analysis of learning effect for the gerontological nursing through the simulation of elder patients by themselves for better understandings of the elderly in the ability of their physical activity

木津由美子，長谷川知佐子，鈴木　通彦
（自衛隊札幌病院　准看護学院）
Yumiko Kizu, Chisako Hasegawa, Michihiko Suzuki

要　旨：老年看護の授業において学生の高齢者理解を促進するため，2年前から擬似体験セットを用いた「高齢者擬似体験」を取り入れている。今回，日常生活「食事」「排泄」「衣服」の援助について体験学習を取り入れ，学生の学習効果について検討した。

キーワード：擬似体験学習，高齢者，老年看護

Abstract：For better understandings of the elderly people by our nursing students, we introduced the "elderly simulated experience" course into our gerontological class two years ago. Three types of daily life supports, including taking meal, excretion, and putting clothes, were adopted into the study. Finally, learning effect was analysed through the reports of the students.

Key words：simulated experience,elderly,gerontological nursing

はじめに

老年看護の授業において，学生の高齢者理解を促進する方法に体験学習が有効であると報告されている[1~3]。当学院でも高齢者理解を深めるために，2年前から擬似体験セットを用いた「高齢者擬似体験」を行い，老年看護の授業における学生の理解を高める効果的な方法について工夫をしてきた[4]。今回，日常生活援助においても高齢者の立場を理解し具体的に援助を考えることができるようにと「食事」「排泄」「衣服」の３つの援助について体験学習を取り入れた。そこで学生の体験学習後のレポートから，体験学習で得られた学びを明らかにし，高齢者理解への学習効果について検討した。

研究目的

老年看護の授業で行った「食事」「排泄」「衣服」の３つの援助について体験学習後のレポートから，学生の学びを分析し，高齢者理解への学習効果について考察することを目的とした。

研究方法

1　対象
本研究の実施に同意の得られた本学院２年生25名

2　研究期間
平成17年１月～８月

3　日常生活援助演習の方法
今回取り入れた授業の概要を表１に示す。

連絡先：〒062－8610　札幌市豊平区平岸１条12丁目１番32号
自衛隊札幌病院　准看護学院　　木　津　由美子
電話：011－831－0161　FAX：011－831－1015

表１　授業の概要

項　目	内　　容
目　　的	体験学習を通して、高齢者に対する日常生活援助の基本がわかり、老年看護の特徴が理解できる。
体験時期	２年次の11月中旬から開始される「老年看護」の第９回目で行う。
体験内容	「食事」「排泄」「衣服」について高齢者と看護者の両方の立場を体験する。
体験時間	１グループにつき１項目30分で交代し、３項目すべて体験する。
レポート	３つの援助項目の体験を通して学んだこと・感じたこと等を記入する。

表２　日常生活援助演習の内容・方法

項目	高齢者の設定条件	演　習　内　容　・　方　法	
食事	利き手が麻痺 （耳栓・ゴーグル・手袋を装着）	トロミ食の試食 トロミ食の自力摂取と介助	1　味噌汁（塩味）、ジュース（甘味）、お茶（無味）の３種類のトロミ食を作り試食する。 2　トロミ食をベッド上座位で自力摂取 3　トロミ食の摂取を介助する（される）。
排泄	左半身麻痺 （耳栓・左肘膝にサポーターと錘を装着）	紙オムツの着用 オムツ交換	1　パンツ型紙オムツを運動着の上からつけ、ズボンを着用する。 2　看護者２名でテープ付オムツと尿取パッドへの交換をする（される）。
衣服	右半身麻痺 （耳栓・右肘膝にサポーターと錘を装着）	介護衣の試着 衣服交換	1　各種介護衣の試着 2　看護者２名で介護衣の更衣をする（される）。

演習の細部は表２に示すように，それぞれの項目に高齢者の設定条件を示し，トロミ剤と介助具（図１），紙オムツ（図２），介護衣（図３）を用いて，高齢者と看護者の立場の両方を体験するようにした。

4　調査分析方法

演習直後，３つの援助項目を体験して，項目ごとに学んだこと・感じたことなどをレポートとして提出を求めた。

体験後のレポートから学びについて抽出し，KJ法のプロセスにそって分析を行った。

5　倫理的配慮

研究の主旨を十分に説明した後，研究協力の有無は成績には影響がないこと，強制ではないことを説明し同意を得た。またデータ分析や公表の際には個人名が特定されないように配慮した。

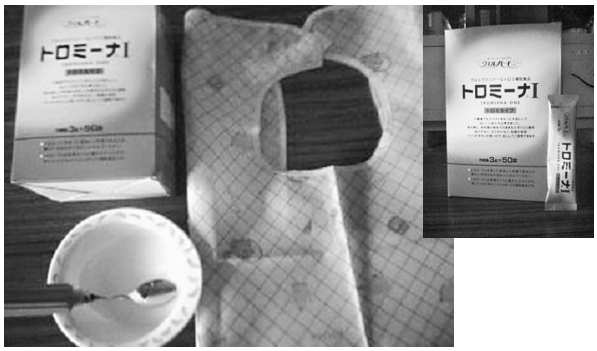

図１　トロミ剤と介助具

図２　紙オムツ

結　　果

1　食事援助からの学び

食事援助体験の学びの記述は77件で，図４は学びを分析し図解化したものである。（以下，【　】は大グループ，＜　＞は中ラベル，≪　≫は小ラベルの内容を示す。）

77件の記述は最終的に，4つの大グループに分類され，【トロミ食に関すること】35件，【看護者としての援助の重要性】20件，【高齢者の立場や状態の理解】12件，【経口摂取による食事の重要性】10件であった。

図３　介護衣

【トロミ食に関すること】では，＜病棟実習で援助を経験したことがあり，興味があった＞と経験を踏まえ，＜はじめてトロミ食を体験し，おいしいとは言えないものを食べて苦痛に感じた＞＜トロミは味気ないし，味が変わりおいしくない＞と感じつつ，トロミ食は＜トロミの硬さによって食べやすさが変わる＞ことを捉えていた。そして，【高齢者の立場や状態の理解】では，お互いに援助されることを体験し，＜介助されて高齢者の気持ちがわかった＞＜視界が悪く，食物の色彩がわかりにくいという高齢者の見え方がわかった＞，高齢者の立場になってみて＜患者はおいしく食事を味わうことは難しい＞ことを捉えていた。そこから【看護者としての援助の重要性】として，高齢者が≪楽しく気持ちよく食事ができるように援助したい≫≪患者が気持ちよく食事ができる工夫が大切≫など＜看護者としての食事援助への思い＞を実感し同時に，≪量を考えた援助≫≪自助具≫≪食欲増進や栄養を考えた援助≫≪介助の際に気をつけること≫など＜看護者としての援助のポイント＞を具体的に捉えていた。また【経口摂取による食事の重要性】では，トロミ食を体験した学生は，普通に食事ができることについて振り返り，≪食事をとることは幸せだ≫≪経口摂取の重要性≫という＜経口摂取の重要性＞とともに，体験から食事について≪生きる楽しみが減る≫≪生きる意欲自信につながる≫など＜食事の意義＞を理解していた。

2　排泄援助からの学び

排泄の援助体験では，学びの記述の総数は68件で，【排泄援助を受ける高齢者の心身への理解】32件，【恥ずかしさを考慮してオムツ交換援助をする】24件，【高齢者と援助者の信頼関係の大切さ】6件，【オムツ体験の感想】４件，【自立にむけた援助の重要性】2件の５つの大グループに分類された（図５）。

【オムツ体験の感想】では，オムツ体験についての率直な感想が見られている。【排泄援助を受ける高齢者の心身への理解】では，＜オムツに対する抵抗感＞＜情けない＞＜尊厳を失う＞＜オムツをして羞恥心があった＞＜援助をされるのは嫌だ＞＜他人に見られるのは苦痛＞＜下の世話をされる気持ちがわかった＞＜早く済ませてほしい＞など高齢者の気持ちと，＜オムツ交換を受ける高齢者の身体状態＞を捉えていた。そして看護者として【恥ずかしさを考慮してオムツ交換援助をする】では，＜オムツ交換時のもれやしわに気をつける＞＜脱がせる工夫＞＜安楽で心地よい援助が重要＞＜保温に注意＞＜羞恥心への配慮が大切＞＜感染防止のため積極的に交換する＞＜丁寧に細かい配慮が大切＞＜露出を最小限に＞＜恥ずかしさに対する援助の難しさ＞など具体的な援助が捉えられていた。その援助を行うために【高齢者と援助者の信頼関係の大切さ】として＜言葉使いに気をつける＞＜介助者の声のかけ方＞＜信頼関係を作ることが大切＞であることを捉えていた。【自立にむけた援助の重要性】では，＜自立を保てるようにする＞＜オムツを使用してもトイレに行くように自立にむけた援助は大事＞であると，高齢者に対する自立にむけた援助の重要性を理解していた。

3　衣服援助からの学び

衣服の援助体験については，53件の学びの記述があった（図６）。

【介護衣に関すること】20件，【衣服援助の方法】15件，【高齢者の立場や状態の理解】10件，【援助で大切なこと】８件の４つに分類された。

【介護衣に関すること】では，＜高齢者でなくてもこの衣服が使用できる＞ことを知り，介護衣を着用して＜介護衣服の利点＞や＜介護衣服の欠点＞を知

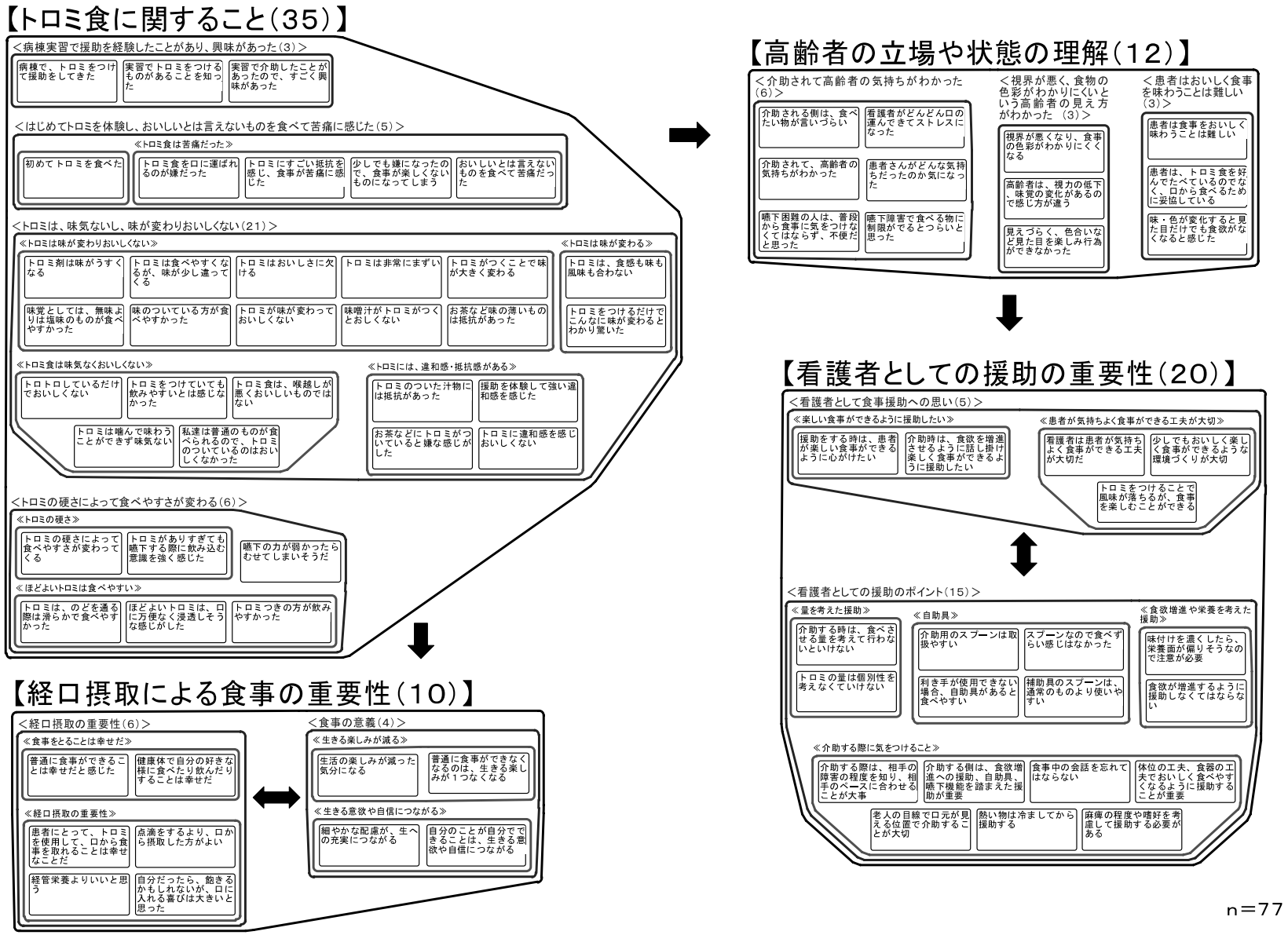

図4　食事援助の学びの分析の図解化

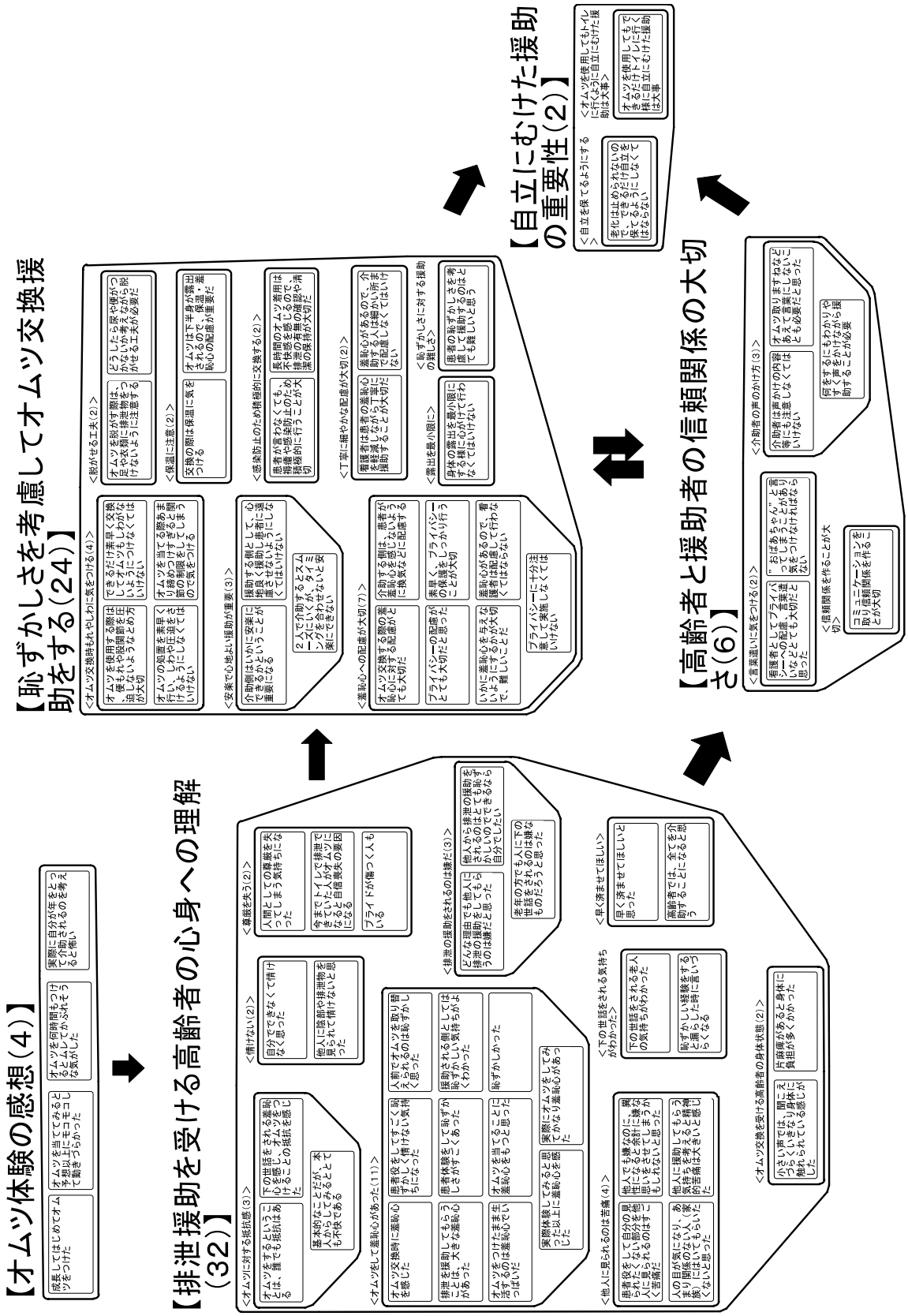

図5　排泄援助の学びの分析の図解化

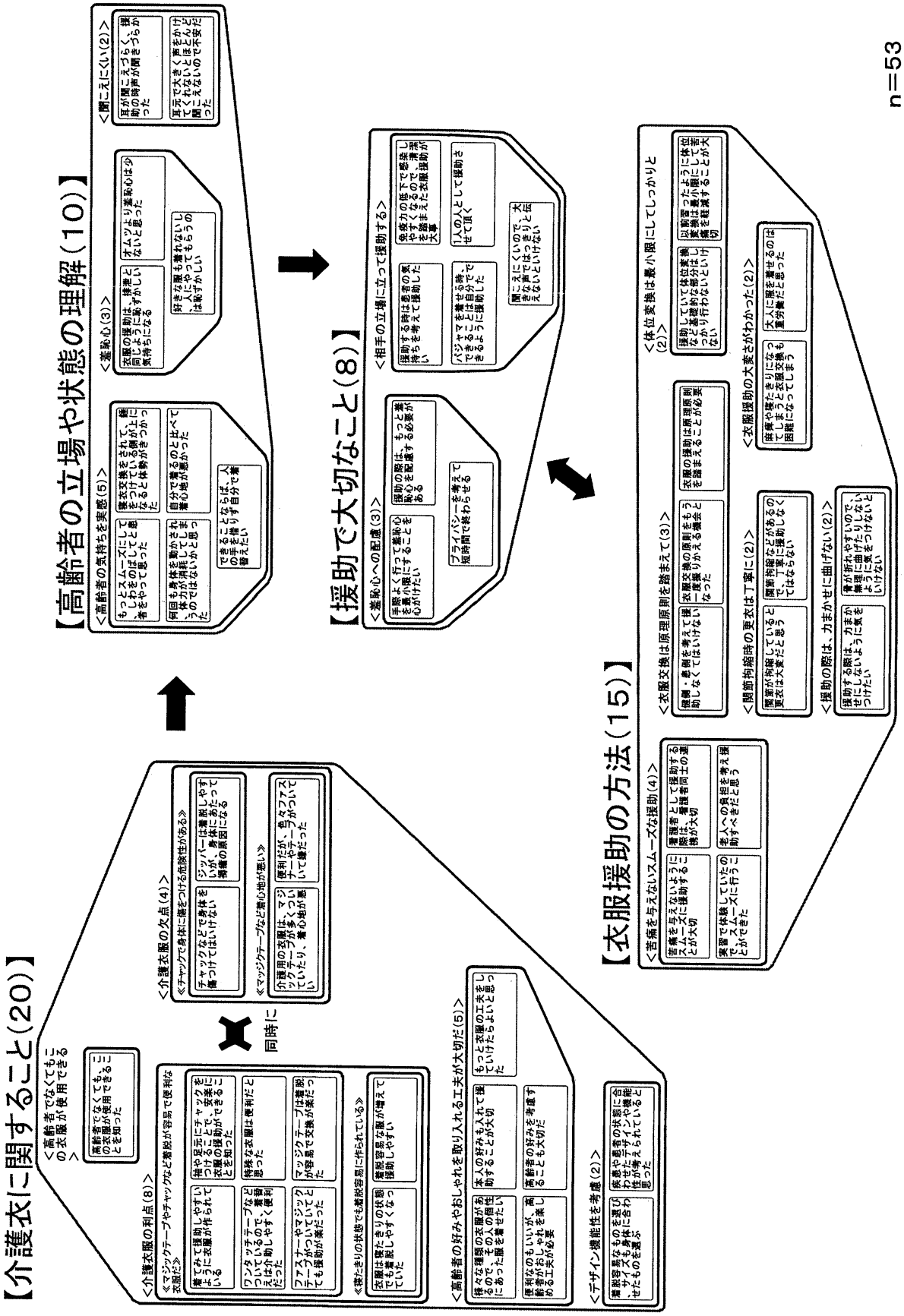

図6　衣服援助の学びの分析の図解化

り，衣服の＜デザインや機能性を考慮＞する必要性や＜高齢者の好みやおしゃれを取り入れる工夫が大切だ＞と理解していた。【高齢者の立場や状態の理解】では，衣服交換に対する＜羞恥心＞や＜高齢者の気持ちを実感＞し，援助の際に耳が＜聞こえにくい＞という身体状況も捉えられていた。そこで看護者の【援助で大切なこと】として，＜羞恥心への配慮＞と患者の気持ちを考えて一人の人として援助するなど＜相手の立場に立って援助する＞ことの必要性を挙げていた。【衣服援助の方法】では，＜衣服援助の大変さがわかった＞ことから，＜苦痛を与えないスムーズな援助＞＜衣服交換は原理原則を踏まえて＞＜関節拘縮時の更衣は丁寧に＞＜援助の際は，力まかせに曲げない＞＜体位変換は最小限にしてしっかりと＞行うという援助技術の習得の重要性を理解していた。

考　　察

1　学びの分析から体験学習の有効性

学生の学びの記述は「食事」が77件，「排泄」が68件，「衣服」が53件あり，その学びの内容は，3つの項目をそれぞれ体験した学生の率直な感想から，高齢者の立場や身体状態を理解し，看護者として援助を行う上で大切なことや援助の方法についての学びが得られていた。

体験学習とは，学習者が自ら体験することで体得する学習方法で，学習の主人公は学習者自身である[5]と言われているように，講義形式のような教員１人対学生多数のような一方的な学習ではなく，教員が準備した学習のプログラムに沿って，学生自らが主体的に学習していくものだと言える。今回の結果を踏まえると，学生は高齢者の立場を体験して，身体に及ぼす苦痛や不快を自らの身体を使って理解し，また自らの心を通して，援助を受ける高齢者の気持ちや感覚を感じ取っていると考えられる。

宗像[6]は体験学習とは，気づきの体験から確信体験をもたらすことで，態度や行動の変容をもたらす力をもっていると述べている。今回の演習で，学生同士の体験から，既習の知識や臨地実習での経験を想起させて，高齢者の心身の状態や立場を理解し，看護者としてどのような援助が望ましいか，高齢者の立場からどのような援助が求められているのかという視点から具体的な援助について考えることができたと言える。

学生が，自分の体験から高齢者と看護者の立場の両方について学びが得られ，自分のすべてを使ってわかり感じ取る体験学習は，学生に様々なことを気づかせ考えさせることができ，教育方法として用いることは効果的であることが明らかになったと言える。

2　体験学習を行うために教員に求められる役割

シミュレーションの目的は，現実の状況について仮想体験を通して，学生の認識を高めることであり，学生が実際にその場に直面した時うまく実践できるようにすることで，シミュレーション活動は，学習プログラムの重要な部分をなす方略である[7]。そこで体験学習を行うために教員に求められる役割として，第１に，学習目標を明確にし，目標を達成させるためには体験学習が最良な方法であるか否かを検討し，実施時期や履修状況を踏まえて，体験学習をプログラムする必要がある。第２に，体験学習を取り入れる前に，学生に対して学習目標や方法・成果について説明すること，また体験学習をより効果的にするためには，バックグランドとなる知識が必要となるため，既習の知識を想起させるなど学生自身の準備を整えておくことも大切である。第３に，体験学習で得られる学びは，学生の主観的なものであり，感じ方や考えた方に個人差があることを前提として，体験学習直後に学生同士が体験し感じたことを自由に言える環境を整える役割が教員に求められると考える。

結　　論

高齢者に対する日常生活援助演習において，「食事」「排泄」「衣服」の３つの項目について体験学習を取り入れ，学生のレポートから学びについて分析を行った結果，以下のことが明らかになった。

1　学生の学びの記述は「食事」が77件，「排泄」が68件，「衣服」が53件あり，その学びの内容は，3つの項目をそれぞれ体験した学生の率直な感想から，高齢者の立場や状態を理解し，看護者として援助を行う上で大切なことや援助の方法についての学びが得られ，体験学習の有効性が明らかになった。

2　体験学習を行うために教員に求められる役割とし

て，⑴ 学習目標を到達するために，実施時期や履修状況を踏まえて体験学習をプログラムする必要性がある。⑵ 体験学習について事前に説明し学生自身の準備を整えておく。⑶ 学生が自由に体験し意見が言える環境を整えることが必要である。

3　体験学習の有効性は明らかになったが，今後の課題として体験学習の方法や内容・時期について検討する必要性がある。

文　献

1）上原佳子，高柳智子，丸橋佐和子，高山成子：看護学生の装具を用いた擬似体験による高齢者理解への効果―体験終了後の自由記載内容の分析から―，福井医科大学研究雑誌 1⑶,481－493,2000

2）柿川房子，石川睦弓，佐藤敏子，甲斐衣津子，中野正孝：老年看護授業展開―高齢者擬似体験学習に関する検討，三重看護学誌 3⑴,175－182,2000

3）竹田恵子，兼光洋子，太湯好子：高齢者擬似体験による高齢者理解の可能性と限界―実施時期による学習効果の違い―,川崎医療福祉学会誌11⑴,65－73,2001

4）木津由美子，斎藤美代子，河本　哲：准看護学生における高齢者擬似体験学習の効果に関する１考察，自衛隊札幌病院研究年報44,41－43,2003

5）犬塚久美子：第４章　体験学習　藤岡完治，野村明美編：わかる授業をつくる看護教育技法３　シミュレーション・体験学習　医学書院　133－144,2000

6）宗像恒次：いまなぜ体験学習か，月間ナーシング 11⑷,24－27,1991

7）レバ　ド　トニエ，マーサＡトンプソン著，中西睦子，荒川唱子訳：看護学教育のストラテジー　医学書院　1993